広島大学心理学研究　第2号　2002

放送大学の授業受講者が生涯学習に対して抱いているイメージと，生涯学習実施に関連する心理的要因

馬越英美子・三宅幹子・森田愛子・松田文子

Image of Long-life Learning and Psychological Factors of its Practice in Students of University of Air

Emiko Magoshi, Motoko Miyake, Aiko Morita, and Fumiko Matsuda

生涯学習の中にも様々な種類があり，種類によってその実施のしやすさや実施に必要な要因なども異なるだろう．馬越・松田(印刷中)では，主婦を対象に，大学（院），市民講座，カルチャースクール，サークルの4種類の生涯学習をとりあげ，各々のイメージを調べた．さらにどの活動を実施しているか，あるいは何も実施していないかによって主婦を群分けし，群ごとに家庭内の心理的要因を検討した．大学（院）に対して主婦が抱いていたイメージは，他の生涯学習活動とは異なっていたが，馬越・松田の調査では，大学（院）の参加者は少数であり，分析対象とならなかった．そこで，本研究では放送大学の授業受講者を対象に調査を行った．その結果，市民講座，カルチャースクール，サークルが娯楽の要素の強い趣味的な活動であるのに対し，大学(院)は目的のはっきりした生涯学習活動であることが示唆された．放送大学の学生になるには，家族の協力を必要とし，本人が主婦の場合は夫の協力が大きな要因であることが分かった．

キーワード: 生涯学習，大学，心理的要因，家庭

問題

現在，法や政策の上では生涯学習を行う環境が着々と整備されてきたが，生涯学習を行う学習者の側の意識や現実の実施状況はどうであろうか．1999年12月に総理府が行った世論調査(総理府，1999）によれば，「これからの社会は，学校で学んだ後も，生涯にわたって新しい知識や技能を学ぶことがますます大切になると思うか」という質問に対し，「そう思う」と答えた者の割合が92%（「そう思う」65%＋「ある程度そう思う」27%）と大変高い．そして，その認識は女性のほうが高く，生涯学習に対する要求も女性では64%に達している．このように多くの人，とりわけ女性は，与えられた諸能力を生涯にわたって発展させ，“生きがい”のある人生を送りたいと願っている．しかし生涯学習の実施となると，趣味的なもの，健康のための活動，スポーツ等を入れても44%にす

ぎず，生涯学習の必要性の認識や生涯学習に対する要求との落差は大きい．多くの人が生涯学習の必要性を認識し，実施したいと思いながら実施しない（あるいは出来ない），その原因は何であろうか．

第一に考えられることは，制度の不備あるいは実施の機会の少なさである．しかしながら，今日各種カルチャースクールは多種多様に用意されており，公的機関の実施する市民講座や公開講座等も，むしろ人の集まらないことのほうが心配されている．従って制度の不備や実施の機会の少なさが主要な原因とは思えない．次に考えられることは経済的な負担の問題である．しかし高等学校進学率は100%に近く，その後の高等教育進学率も50%に近いことを考えると，少なくとも子どもの教育費には相当のお金が注げるのであるから，経済的なことが主要な原因とも思えない．

従って，生涯学習の必要性の認識や生涯学習に対する要求の高さに比較してその実施率が低いのは，機会が十分に知られていないこと，及び，より個人的で心理的な要因が主要な原因となっているのではないかと推測される．

馬越・松田（印刷中）では，主婦に焦点をあて，生涯学習の実施に関連すると思われる家庭内の要因や個人の要因について質問紙を用いて検討した．まず，生涯学習活動を実施する際に，どのような要因を考慮するのかを20項目について調べた．因子分析の結果，表1のように，「みばえの良さ」，「参加しやすさ」，「充実感」，「有益性」，「楽しみ」の5因子を抽出した．さらに，5因子には含まれなかったが，実施に際して考慮する程度の高かった「新知識・技能」「お金」「能力」「家族の協力」に関係した4つの項目も特殊因子として抽出した．

表1　イメージ調査に使用した5因子と4項目の内容

因子（項目）名	項目
みばえの良さ	周りの人に認めてもらえるかどうか
	他の人より優れているような気持ちになれるかどうか
	世間体が良いかどうか
	時代の流れに乗れるようになるかどうか
参加しやすさ	堅苦しくて加わりにくいことはないかどうか
	気軽に参加できるかどうか
	今から始めるのは遅い、ということはないかどうか
充実感	生活にうるおいが出るかどうか
	老後の趣味になるかどうか
	充実感を得ることができるかどうか
有益性	学んだ知識や技術が、仕事や生活の役に立つかどうか
	身に付けるのに時間がかかる知識や技能を学ぶことができるかどうか
	色々な面から物事が考えられるようになるかどうか
楽しみ	楽しいかどうか
	刺激が得られるかどうか
新知識・技能	新しいことを知ったりできるようになるかどうか
お金	お金がかかるかどうか
能力	能力が必要であるかどうか
家族の協力	家族の協力が必要であるかどうか

次に，4種類の生涯学習活動，すなわち「大学・大学院（科目履修生を含む）に入学して勉学することについて（以下，「大学（院）」とする）」，「公的機関が実施する市民講座へ参加することについて（以下，「市民講座」とする）」，「私的企業が実施するカルチャースクール（おけいこごと，通信教育等を含む）への参加について（以下，「カルチャースクール」とする）」，「友人等によるサークル活動への参加について（以下，「サークル」とする）」をとりあげ，主婦がそれらの生涯学習活動に対して抱くイメージを，上記の5因子と4項目を用いて調べた．その結果，これら4種類の生涯学習活動に対するイメージは，図1の右図のように，それぞれ異なっていることが明らかになった．このように，生涯学習活動の種類によってイメージが異なるのであれば，その実施理由あるいは実施できない理由も異なることが予測される．そこで，4種類の生涯学習活動のどれを実施しているか，あるいは何もしていないかで主婦を群分けし，生涯学習活動についての認識や要求，家庭内の要因，自分についての要因，自己効力感などが群によってどのように異なるかを検討した．被調査者の主婦は，次のような5群に分類された．すなわち，群1はカルチャースクールのみの実施者と市民講座・カルチャースクール両方の実施者，群2はサークルのみの実施者，群3は市民講座のみの実施者と市民講座・サークル両方の実施者，群4はカルチャースクールとサークル両方の実施者と，市民講座・カルチャースクール・サークルの3つともの実施者，群5は何にも実施していない人であった．大学（院）の実施者は，3人（被調査者の0.6%）であったので分析から除いた．分析の結果，まず家族の要因については，楽しみや充実感があり，お金のかかるカルチャースクールやサークルに種々参加している人は，子どもや家庭について，よく認識していると思っていることが明らかになった．また，それらの人は，夫の性格や仕事にも満足しており，夫や家庭を大切にしていると回答していた．すなわち，主婦が娯楽的要素の強い生涯学習活動を実施するにあたっては，家庭が安定していることや夫との関係が良好であること，または経済的な豊かさが影響を与えると考えられた．自分の要因については，友人等によるサークル活動の実施者が自分の性格が重要であると認識していた．友人関係を保ち，その関係に基づいた生涯学習活動が楽しいものであるためには，その人の性格が大きな要素になることを示唆していると思われる．また，自己効力感については，サークルやカルチャースクールを複数実施している人は，自己効力感が高く，特に行動の積極性を示す因子の得点が高かった．

以上のように，馬越・松田（印刷中）は，主婦において，生涯学習活動の種類によって，実施理由が異なり，またその背景となる家庭や自己の要因の影響が異なることを明らかにした．しかし，上述したように，大学（院）の参加者は少数であったために分析対象としなかった．大学（院）は，現在，生涯学習活動として整備されているにも関わらず，その参加者は決して多くない．また，馬越・松田においても，大学（院）に対するイメージは他の生涯学習活動と大きく異なっている．

そこで本研究では，生涯学習活動として大学に在籍していると考えられる，放送大学の授業の受講者を対象に，馬越・松田（印刷中）と類似の質問紙調査を実施した．また，受講者の年齢や生活環境が多様であることを考慮し，面接を行って実施理由や実施の背景を詳細に検討した．

方法

被調査者　被調査者は放送大学広島学習センターで，心理学関係の集中授業を受講した15名（男性4名，平均年齢39.5歳；女性11名，平均年齢45.7歳）であった．

質問紙　1．イメージ調査．まず4種類の生涯学習活動に対して，放送大学の授業受講者がどのようなイメージを持っているのかを検討した．「大学・大学院（科目履修生を含む）に入学して勉学することについて」，「公的機関が実施する市民講座へ参加することについて」，「私的企業が実施するカルチャースクール（おけいこごと，通信教育等を含む）への参加について」，「友人等によるサークル活動への参加について」をとりあげ，表1の項目について，「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を5段階（5〜1）で評定してもらった．2．背景要因の調査．次に，馬越・松田（印刷中）で用いた質問紙を，主婦に限らず，男性でも未婚者でも使用できるように一部改訂し，自己についての要因や，自己効力感などについて検討した．質問紙は，生涯学習の認識度，要求度，重要度に関する質問項目各4項目，自分についての認識度，満足度，重要度に関する質問項目各5項目から構成されていた（表2）．各項目について，「非常に〜である」から「全く〜でない」の5段階で評定してもらった（5〜1）．

表2　背景要因の調査に用いた質問紙の内容

I		
	年齢	
	家族構成	
	職業	
	実施している生涯学習活動	
	生涯学習活動実施理由	
II		
4種類の生涯学習活動（大学・大学院、市民講座、カルチャースクール、サークル活動）について		
	①	認識度：どの程度知っているか
	②	要求度：どの程度したいとおもっているか
	③	必要度：どの程度必要としているか
自分の性格・能力，家庭内での仕事・決定権・経済主導権について		
	①	認識度：どの程度知っているか
	②	満足度：どの程度満足しているか
	③	重要度：どの程度大切か

さらに，自己効力感を測定するため，表3に示すような坂野・東條（1986）の一般性セルフ・エフィカシー尺度を使用した．自己効力感尺度については，「はい」「いいえ」の2件法で回答してもらった．この尺度は3因子からなる（本研究のデータを用いて，改めて因子分析を行なったが，ほぼ同様の3因子が抽出されたので，坂野・東條，1986，の分類をそのまま用いることにした．ただし，本研究では，自己効力感が高いほど高得点になるように得点化したため，坂野・東條の「失敗に対する不安」因子を「失敗に対する低不安」因子と改名した）．この他，被調査者の年齢，家族構成，生涯学習活動実施の目的の記載も求めた．質問紙は無記名であった．調査は授業時間の最初に実施し，その場で回収した．

面接調査　被調査者のうち同意の取れた人（男性２名，女性８名）を対象に半構造化面接を実施した．面接では，谷島・新井（1994）や浅野（2001）を参考にし，1.自己向上志向・課題志向の萌芽を裏づけるために，青春時代の学問に対する取り組みとその状況，2.学習動機の強化プロセスを知る上で，卒業後の就職状況，社会での経験，3.継続意志と積極的関与を知るために，放送大学入学の動機と現在の状況の３側面について尋ねた．面接の所要時間は一人あたり平均15分であった．

表3　自己効力感尺度の質問項目

因子	項目番号と質問項目	
Ⅰ 行動の積極性	1. 何か仕事をする時は、自信を持ってやるほうである	
	5. 人と比べて心配性のほうである	*
	6. 何かを決めるとき、迷わず決定するほうである	
	8. ひっこみじあんなほうだと思う	*
	10. 結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う	
	13. どんなことでも積極的にこなすほうである	
	15. 積極的に活動するのは、苦手なほうである	*
Ⅱ 失敗に対する低不安	2. 過去に犯した失敗や嫌な経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある	*
	4. 仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い	*
	7. 何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い	*
	11. どうやったらよいか決心がつかず仕事にとりかかれないことがよくある	*
	14. 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである	*
Ⅲ 能力の社会的位置づけ	3. 友人より優れた能力がある	
	9. 人より記憶力がよいほうだと思う	
	12. 友人よりも特に優れて知識を持っている分野がある	
	16. 世の中に貢献できる力があると思う	

注．評定は「はい」「いいえ」の2件法．
＊のついた項目は逆転項目．

結果

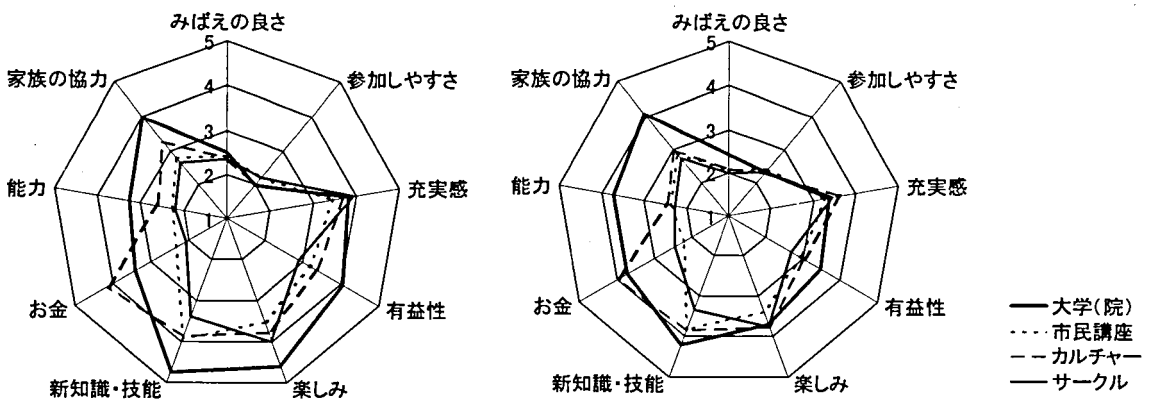
イメージ調査　質問紙については，回収した15人の質問紙に記載漏れがなかったので，４種類の代表的な生涯学習活動に参加することについて，表１の５因子と４項目ごとに被調査者15人の平均評定値を算出した．結果は図１である．比較のために，図１には馬越・松田（印刷中）における主婦の結果も右に示してある．

背景要因の調査　まず，家族構成，職業の有無，生涯学習実施状況，生涯学習活動実施理由についての集計結果を表４に示す．また，生涯学習の認識度，要求度，重要度に関する質問項目各４項目，自分についての認識度，満足度，重要度に関する質問項目各５項目について，被調査者15人の平均評定値と*SD*を算出した結果が表５である．また，同様の項目について馬越・松田（印刷中）の主婦486人の平均評定値と，比較した*t*検定の結果も表５には示してある．

面接調査　面接内容を各人毎にまとめて表６に示す．

考察

イメージ調査の結果を見ると，本研究の被調査者が大学（院）に対して抱いているイメージは，馬越・松田（印刷中）における主婦が大学（院）に対して抱いているイメージとは若干異なること



放送大学受講生　　主婦(馬越・松田, 印刷中, より)

図1　各生涯学習活動に対するイメージの平均評定値

表4　家族構成、職業の有無、生涯学習実施状況, 生涯学習活動実施理由

調査事項	結果
同居率(%)	
配偶者	53
父親	27
母親	33
祖父	0
祖母	7
兄弟	13
子ども有率(%)	
長子平均年齢(歳)	19.13
末子平均年齢(歳)	17.60
有職率(%)	87
生涯学習実施率(%)	
大学、(院)	100
市民講座	7
カルチャー	20
サークル	27
その他	27
実施理由(%)(複数回答可)	
レベルアップ	53
趣味	40
仲間作り	13
生きがい	67
その他	20

表5　背景要因の調査の各項目と自己効力感における, 平均値(*SD*), および馬越・松田(印刷中)との比較

		放送大学 *n*=15 平均値 *SD*		馬越・松田の主婦 *n*=489 平均値 *SD*
大学(院)	認識度	3.33 (0.72)	>	2.70 (0.74)
市民講座		2.67 (0.90)		2.96 (0.75)
カルチャー		2.67 (0.62)		3.01 (0.84)
サークル		2.20 (1.08)		2.62 (0.89)
大学(院)	要求度	4.53 (0.74)	>	2.51 (0.97)
市民講座		2.87 (0.83)		2.97 (0.93)
カルチャー		2.47 (1.13)	<	2.99 (0.94)
サークル		2.67 (1.11)		2.70 (0.93)
大学(院)	必要度	4.47 (0.74)	>	2.24 (0.94)
公的		3.13 (1.13)	>	2.63 (0.93)
私的		2.80 (1.15)		2.65 (0.94)
サークル		2.87 (1.36)		2.42 (0.91)
自分性格	認識度	3.53 (0.99)	<	4.20 (0.65)
自分能力		3.40 (0.99)	<	3.95 (0.74)
自分家庭内仕事		3.80 (1.15)	<	4.29 (0.63)
自分家庭内決定権		3.80 (1.15)		4.13 (0.65)
家庭経済主導権		4.07 (1.10)		4.06 (0.77)
自分性格	満足度	2.67 (0.98)		2.88 (0.78)
自分能力		2.20 (0.77)	<	2.73 (0.83)
自分家庭内仕事		3.73 (1.03)	>	3.02 (0.87)
自分家庭内決定権		3.47 (1.25)		3.47 (0.83)
家庭経済主導権		3.80 (0.86)		3.50 (0.86)
自分性格	重要度	4.20 (0.86)		4.01 (0.71)
自分能力		4.00 (0.85)		3.83 (0.71)
自分家庭内仕事		3.40 (0.83)	<	3.99 (0.75)
自分家庭内決定権		4.40 (0.83)	>	3.70 (0.73)
家庭経済主導権		3.47 (0.99)		3.65 (0.77)
自己効力感		0.57 (0.29)		0.58 (0.24)
因子1(行動の積極性)		0.57 (0.30)		0.53 (0.30)
因子2(失敗に対する低不安)		0.57 (0.33)		0.67 (0.30)
因子3(能力の社会的位置づけ)		0.55 (0.39)		0.55 (0.32)

注. 得点範囲は5～1. 高得点であるほど, 認識度・要求度・必要度・満足度・重要度が高いことを示す.
不等号はその方向に有意差のあることを示す(t検定, $p < .05$).

表6　面接結果

Aさん 男55歳 既婚	充実した高校生活をおくっていたが，親の仕事の失敗により大学進学を断念． 地方公務員として働く． 働きながら30歳の時から，医学部進学を目指し2回受験したが，失敗． 55歳まで働き，その後は好きなことをするとの人生設計を立てる． 50歳頃より精神的に病み，54歳で退職．現在，妻が生活を支えてくれている． 将来，医者の娘と仕事をするために，臨床心理士を目指している．
Bさん 女34歳 既婚	高校・4大時代ともに充実した楽しい学生時代を過ごした． 卒業後すぐに結婚した為，子育てが一段落して仕事を始めた． 現在，公文の教室で働いているが，スクールカウンセラーを目指し勉強している． 夫からは，生き生きした妻でいることを求められ，全面的な協力を得ている． 夫の両親も子どもの世話等協力してくれている．
Cさん 女64歳 未婚	恵まれた家庭に育ち，充実した学生時代をすごした． 望みどうりに看護婦となり定年まで働くことが出来た． 定年後，ボランティアとして知的障害者のケァーをしたが，体力的に無理であった． 自己の完成を目指して学び，精神的ケァーのボランティアか仕事をしたいと思っている． 仕事等無理でも，自己完成と生きがいを求め，学び続けたいと思っている．
Dさん 男42歳 現在未婚	現役で希望の大学に進学したが中退．学生時代は最悪であった． 結婚した為やむなく仕事についたが，不満もあり職種にも限界を感じている． 離婚等生活に変化をきたしたことから心理学に興味を持ち，働きながら勉強を始めた． 転職し，役に立っているという実感を得たいと願っている． 大学中退，離婚により迷惑をかけた親に，大学院まで卒業し喜ばせたい． 親の願いでもあるので，全面的に応援してくれている．
Eさん 女43歳 既婚	大学1年で退学し，結婚． 仕事には満足していたが，中退したことが心から離れなかった． 子育てが一段落したことから勉強を再開した． やっと念願が叶い，生きがいを感じ，益々学問の幅を広げていきたいと思っている． 家族も協力してくれている． 特に夫の協力ぶりには感謝しており，夫の協力なしには叶わないことだと思っている．
Fさん 女43歳 既婚	勉強も好きではなく，目標もなかったので大学にはいかなかった． 結婚前から子どもが出来るまでパートとして働いていた． 子どもの幼稚園入園の際，学歴記載欄があり，コンプレックスをいだき，かなり悩んだ． コンプレックス解消のため勉強を始めた． 家族はとても喜んで協力してくれている． 特に夫は，バイトまでしてくれて支えてくれている．
Gさん 女46歳 既婚	充実した学生生活をおくり，仕事にもつけた． 仕事は順調ではあるが，やらせてもらえることが限られていることが不満になってきた． スキルアップをはかり仕事の幅を広げることが出来たら，今の仕事が生きがいになると思う． 夫も，子育てが一段落したことから，仕事が充実することを願ってくれて協力してくれている．
Hさん 女60歳 未亡人	実母の死により父親が再婚し，思うように勉強できなかった． 結婚したものの，早くに未亡人になり一人で2人の子どもを育てた． 子育ても一段落し，仕事のスキルアップと生きがいを見つけるために勉強を始めた． 年をとっての大学入学で，ついていけないのではと心配したが，とても楽しい． 仕事のスキルアップにはならないかもしれないが，間違いなく生きがいになっている．
Iさん 女49歳 既婚	なんとなく過ごした学生時代だった． 子育ても一段落し，更年期障害に悩まされ，生きがいを無くしてしまった． 夫の強い勧めで無理やり始めさせられたが，今はとても楽しい． 何もしなかったら，死んでいたかもしれないと思うと夫に本当に感謝している． 今は，勉強を生かして卒業後は仕事を持ちたいと思っている．
Jさん 女53歳 現在未婚	充実した学生時代を過ごし，そのまま職にもついた． 子どもが出来ても両親の助けを受け，仕事を続けた． 現在，子どもも独立し，自分の仕事も順調である． 今後は，自分と両親の生活のために大学で勉強しスキルアップをはかりたい． 女性が仕事を続けたり生涯学習をするには，よほど協力してくれる夫でない限り，いないほうがよい．

が明らかになった．すなわち，新知識・技能が得られ，有益性が高く，楽しく充実感があるという点で主婦のイメージより一段と高く，他方能力やお金は主婦より必要としないというイメージがあった．家族の協力の必要性については両群とも同程度に高かった．大学（院）での勉学の実施は，やってみると意外に敷居が低く，楽しく充実したものであることがイメージからも面接調査からも感じられた．また，本研究の被調査者が，他の３つの生涯学習活動に対して抱いているイメージは主婦の場合とほとんど変わらないものであった．

背景要因の調査の結果からは，以下のようなことが明らかになった．まず，生涯学習活動に参加することについての認識度，要求度，重要度のいずれにおいても，実際に参加している大学（院）についての得点が高いことが示された．特に，大学（院）実施の重要度と必要度は馬越・松田（印刷中）の主婦よりもはるかに得点が高かった．実際に実施している活動についての得点が高くなる，という結果は，馬越・松田の場合と同様である．このことは，生涯学習活動が，全般的に，実施者が自ら求めて実施する活動であることを示唆している．また，本研究の被調査者は，馬越・松田の被調査者に比べ，自分の能力に対する認識度と満足度の得点が低く，自分の家庭内の決定権の重要度の得点が高いことが示された．自己効力感については，「失敗に対する低不安」の得点が馬越・松田の主婦に比べて低かった．

このような背景要因の調査結果は何を意味しているのであろうか．大学（院）実施の重要度と必要度の得点が馬越・松田（印刷中）の主婦よりもはるかに高かったことから，本研究における放送大学の受講者は，放送大学での学習が自分にとって非常に重要なことであるとし，自分で決意し，求めて学んでいることが分かる．イメージ調査の結果を見ると，本研究でも馬越・松田でも，被調査者は，大学（院）で学ぶことは他の３種類の生涯学習活動と比較して能力が必要であるというイメージを抱いている．すなわち，高い能力が必要な活動にあえて挑戦している人々であると考えられる．ところがその一方で，彼らの自分の能力への満足度や自己効力感が，馬越・松田の主婦と比べて低いという結果は，どのように解釈すべきであろうか．一つの原因として，比較対象とした馬越・松田の被調査者における，自分の能力への満足度，「失敗に対する低不安」が非常に高かったのだということが考えられる．放送大学受講者が自立を目指し，目的に向かって努力しているのに対し，馬越・松田が調査した主婦は，恵まれた環境にあり，失敗に対する不安すら感じる状況ではなかったのかもしれない．

そして，本研究での調査者は，自分の能力に満足していないからこそ向上を求めて放送大学の授業を受けているということが考えられる．「失敗に対する低不安」の得点が低いということも，失敗することが不安で行動できないことを示しているのではないのかもしれない．むしろ，自己効力感尺度の「友人よりも優れた能力がある」という項目に代表されるように，自分に人より勝る能力があるわけではないという認識を表しているのではないかと考えられる．本研究の被調査者は，自分のスキルアップのため，あるいは自己を磨くために，新しい知識を求め，積極的に学んでいるのではないかと思われる．面接調査での「自己完成と生きがいを求め，学び続けたい」や「勉強を生かして卒業後は仕事を持ちたい」という言葉もそれを支持している．面接調査の結果をみると，放送大学入学の理由は，転職を考えての勉強であったり，現在の職業のスキルアップであったりと目的

がはっきりしている．また，生きがいを求めるにしても，ただ漠然としたものではなく，目標に向かって自己実現をしたいと考えている人が多かった．これは，趣味的な生涯学習活動と異なり，実施することにより評価という形で結果が見えやすいこと，その結果によって自分のみならず，世間的にも評価を受けられる為ではないかと考えられる．人生を充実したものにするためには，社会との接触を求めて活動し，さらにその活動による進歩が感じられることの重要性をこの結果は示しているのではなかろうか．実施にあたっては，本人の意思は無論のこと，かなり積極的な家族の協力があること，特に主婦の場合は夫の協力が非常に大きいことがうかがえた．平成4年の生涯学習審議会答申の「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」の主張でも，主婦自身が生活や職業上の能力の向上，自己の充実を目指し，自発的に自分を磨き，可能な限り自分に適した手段や方法を選びながら研鑽し，生涯を通じて魅力ある女性として，家族のことを理解することに勤め，円満な家庭の形成に力を注ぐこととある．主婦のみならず，生涯学習活動の実施は，より良い人生，充実した自己実現を目指すことを目標とすることから，家庭内の円満な運営，自己実現こそ生涯学習活動実施を促進する大きな要因といえるであろう．

引用文献

赤松達也　2001　カウンセリングのあり方　産婦人科の実際, 50, 805-811.

Bolger, N., Delongis, A., Kessler, R. C., & Wethington, E. 1990 The microstructure of daily rolerelated stress in married couples. In J. Eckenrode, & S. Gore (Eds.) *Stress between work and family.* New York: Plenum Press, pp. 95-115.

平山・柏木　2001　中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？　発達心理学研究, 12, 216-227.

池田秀男　1997　生涯教育と生涯学習　日本生涯教育学会（編）　生涯学習辞典　東京書籍　p p.12-17.

市川伸一　1998　認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導　ブレーン出版

柏木恵子・数井みゆき・大野祥子　1996　結婚・家族観の変動に関する研究(1)~(3)　日本発達心理学会第7回大会発表論文集, 240—242.

坂野雄二・東條光彦　1986　一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み　行動療法研究, 12, 73-82.

生涯学習・社会教育行政研究会（編）　2002　生涯学習・社会教育行政必携（平成14年版）　第一法規出版

総理府　1999　生涯学習に関する世論調査　総理府（内閣総理大臣官房広報室）

持田栄一・森隆夫・諸岡和房　1979　生涯学習事典　資料・文献編　ぎょうせい